



「学び」と「寛容」

●
高木昌宏 Masahiro TAKAGI

北陸先端科学技術大学院大学マテリアルサイエンス系 教授・日本生物工学会 会長



大学に入学して最初の有機化学の授業で先生は、紫、黄色、赤など、色のついた液体の入った試験管を学生に見せながら、「私は、この色の世界に魅せられて化学の分野を志しました」と我々に話をされました。大学教員になった今、学生たちに「なぜこの分野を選んだのか？」と尋ねると、およそ2つの答えに集約されます。「環境問題を解決したい」と「病気の人を救いたい」のどちらかです。確かに、環境問題も医療問題も解決すべき重要な問題ですが、人類そして科学技術に共通の問題です。学生たちの回答は、正しくはあるが、私が教わった有機化学の先生と比べれば、全くの没個性的な回答です。

現代社会は、インターネットが普及し自由にコミュニケーションができる反面、お互いを監視し、枠からはみ出ることを恐れる「巨大な村社会」が形成されてしまいました。生まれたときからそんな環境に育ってきた若者ならなおさら、評価を気にして個性を押し殺し、正しい答えを自分の中ではなく外に求め、当たり前の答えが見つかった時点で、思考が停止状態になっている。そんな分析が、この状況に対して成り立つように感じます。

村社会の中で、他者からの評価を気にしながら生きるのは、とても息苦しくて、個々人が自由で個性的で幸福な状態とはいえないでしょう。そして将来、優れた技術者・科学者になるために求められる創造性を育むことも、そんな社会では期待できません。

もちろん、個人が自由で個性的であるためには、多くの障壁があります。「他者の評価を気にかけず、他者から嫌われることを怖れず、承認されないかも知れないというコストを支払わないかぎり自分の生き方を貫くことはできない。つまり、自由になれないのです」(岸見一郎・古賀史健：嫌われる勇気)

そこで、2つの要素が重要になると考えます。1つ目は、障壁を乗り越える力を育む「学び」です。具体的には、リベラルアーツ、日本語では、教養と訳されますが、直訳すれば、自由になる技術です。つまり、「学び」を通して身に付く、基礎学力、対人力、自己制御力です。「我々は、自由になるために学ぶ」とすらいえると思います。そして2つ目は、障壁を低くするための「寛容」です。自分自身を受け容れる自己寛容と、異なる価値観を認める他者寛容です。若者の没個性を嘆く前にまず、日本の社会が、自由を希求する「学び」の機会を提供し、自他の価値観に対して「寛容」であるかについて、今こそ我々が、自省を込めつつ考えなくてはならないのではないのでしょうか？

最後に、アップル社創業者の1人、Steve Jobs氏の言葉を引用します。彼は早くから、学びと寛容の大切さに、気づいていたのでしょう。

“It is in Apple’s DNA that technology alone is not enough—it’s technology married with liberal arts, married with the humanities, that yields us the results that make our heart sing.” (Steve Jobs)

© 2020 The Chemical Society of Japan